



一條神社



一條神社由緒

一條神社は、一條教房公が中村の地に下向されて後、中村御所内の小森山に一條家の先祖の御廟所をお祀りしたことに始まる。土佐一條家の滅亡後、慶長十二年（一六〇八年）一條家の遺臣たちは、土地の庄屋たちと相談し、一條家の徳を仰ぎ祠を建て、一條家にかわる人々の霊をお祀りした。

一條家は遠く、中臣鎌足（藤原鎌足）に始まり、九條家、一條家と続き五撰家のひとつである。

前関白教房公下向後、息子房家公を初代として土佐一條家と呼ぶようになる。特に教房公、房家公は、中村に京都の文化を取り入れた街づくりに励まれ、小森山（当神社）を中心に東西百十五米、南北百五十米にわたる広大な土地に御所館を構え、館の中には蹴鞠場、藤見の藤遊亭、七つの井戸があり境内には女官たちが使ったというお化粧の井戸が残っている。御所館の周りには碁盤目に町並みをつくり、家臣や商家がきらびやかに立ち並んだという。今も京町、宮田小路、羽生小路、鴨川、東山などの地名が残っている。

また、藤原氏の祖先を祀る春日神社、京都八坂神社を勧請した祇園神社、石清水八幡宮を勧請した不破八幡宮等を創建した。さらに、下田港、清水港などから、明との貿易も行い、一條家は富み栄え土佐第一の町として賑わい、土佐の小京都と呼ばれた。しかし度重なる洪水、地震、火災のため消失し、当時を偲ぶものが少ないのは残念なことである。

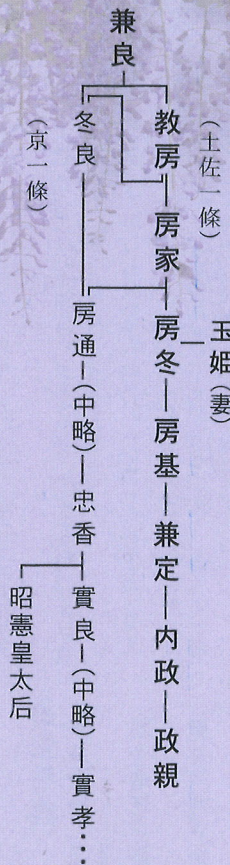
土佐国司、土佐一條四代兼定公が中村御所を去るときに、「植え置きし庭の藤ヶ枝心あらば 来む春ばかり 咲くな匂ふな」と詠まれた「咲かずの藤」が文久元年（一八六一年）見事に美しく花を咲かせるということが起こり、時の幡多郡奉行、中村目代、大庄屋等一体となり、一條家の遺徳を顕彰し、幡多郡民の総鎮守の神として崇め奉るため、社殿を造営し、毎年三月には神輿を、十月の祭礼には相撲を奉納することなどを定め、一大祭典を行う事を郡民に命じて翌年の文久二年（一八六二年）一條神社が創建された。

現在、一條大祭は土佐の三大祭りの一つと数えられ、当日は数万の参詣人で賑わっている。

明治三十三年（一九〇〇年）に県社に列し、皇室の尊崇も厚く昭憲皇太后（旧名一條美子）明治天皇の皇后の御代参、御下賜金を賜り大正十一年（一九二二年）十一月には、摂政宮殿下（昭和天皇）の名代として侍従の御参拝、また昭和三年（一九二八年）には久邇宮朝融王殿下が御参拝された。

社殿は大正三年（一九一四年）大修理を行い、昭和九年（一九三四年）には境内地を三倍強に拡張を為し、社務所を改築する。続いて社殿の改修に取りかかり昭和十九年（一九四四年）戦時下であったが幾多の困難を克服して完成させ現在に至る。

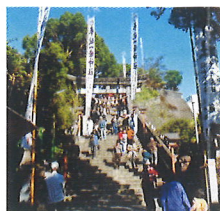
土佐一條氏略系



公家行列 玉姫役



公家行列



一條大祭



御化粧の井戸



玉姫の墓



一條房基公の墓



一條兼定公の墓(愛媛県戸島)



一條教房公の墓

